



バッハの森通信

第 137 号
2017 年
10 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

共感と感動を求めて

バッハの森の原点

創立以来 32 年たつと、「バッハの森」が創立された経緯を知っている方々も少なくなつたようです。1985 年 1 月 13 日に、バッハの森は開館記念の集いを開きました。そこで語られた開館の経緯が『バッハの森通信』第 6 号に載っています。この日に先立つ 4 年半前、1980 年 6 月に桜村（現在のつくば市）の竹園公務員宿舎の石田宅の狭いリビングに集まった 25 人が、バッハのカンタータ「神の時は最良の時」（BWV 106）を歌ったときにすべては始まった、とそれは報告します。研究学園都市が半分しか出来上がっていなかった時代に、それ以来、練習会場を探し求めて点々と移動しながら会員 70 名を集め、毎年 2 回、大会館でコンサートを開いてきた「筑波バッハ合唱団・合奏団」の皆さんと一緒に、1985 年に「バッハの森」は創立されました。ただしこの報告は「私たち夫婦が教会音楽の響きを求めて歩んで来た私的な前史を省略する」と断っています。

* * *

言うまでもなく、バッハの森は、報告を省略した私的な前史の準備があつてできたことでした。ここで、バッハの森の原点を、石田一子（1929～2008）を追悼した彼女の半生記から拾ってみます（『バッハの森通信』第 103 号、2009 年 4 月 20 日発行）。

彼女が 16 歳のときに戦争が終わりました。焼け野原の東京に住む多感な少女が、小学生時代に始めたピアノを止めて、教会オルガニストになる志を立てたのは 19 歳のときでした。そこでキリスト教音楽学校に学び、講和条約前の海外渡航が非常に困難な時代、21 歳のときに母親の友人だったアメリカ人夫妻から招待され、ロチェスターのイーストマン音楽学校のオルガン科に留学しました。日本はもとよりヨーロッパ諸国も戦火で荒れ果て、学べる場所はアメリカだけでした。イーストマンの 4 年間で、オルガン音楽とその演奏技術をしっかり学びましたが、これでは教会オルガニストにはなれないと思った彼女は、ニューヨークのユニオン神学大学の宗教音楽科で更に 3 年間学んでか

ら帰国しました。

帰国した彼女は、キリスト教音楽学校オルガン科の主任に迎えられ、日本各地で開かれる教会オルガニスト育成講習会の講師となり、まだ日本に数台しかなかったパイプオルガンでコンサートを開き、英語圏の人々を中心メンバーとする東京ユニオン・チャーチのオルガニストを務めました。それからの 14 年間、多忙を極めた生活を送りながら、これが追い求めてきた教会オルガニストの活動なのか、という疑問を自問自答していました。

* * *

帰国後 14 年目にオランダのハーレムで開かれたオルガン・アカデミーに参加し、帰国の途上、エルサレムで聖書学を学んでいた私を訪ね、9 年ぶりに再会したことが彼女の転機となりました。その年の暮れに彼女と私は結婚し、彼女はドイツ教会のオルガニストになりました。42 歳でした。その翌年、彼女と私は、乗り気でないドイツ人の牧師を説き伏せて、オルガン・コンサートを開きました。350 席の会堂は、普段は決して教会に来ないユダヤ人も多数来て満席になりました。彼女がバッハのファンタジア・フーガ短調（BWV 542）を弾き終わったとき、感動した聴衆の拍手は鳴り止みませんでした。互いに交流を拒否しているユダヤ人とキリスト教徒が、音楽を通して感動を共にした瞬間でした。

エルサレムで、彼女はもう一つの重要な経験をしました。礼拝の後でディアコニッセ（福音主義教会の修道女）たちが、彼女が弾いたコラール編曲について、あれは私の愛唱歌だとか、丁度聴きたかったコラールだとか、内面的な共感を口々に語ってくれたことでした。それまで英語圏の会衆の教会オルガニストしか経験がなかった彼女に、これは新しい喜びでした。コラールがルター以来、ドイツ人の魂の歌であり、バッハの宗教音楽の基礎である理由が分かったのです。こうして、彼女は、自分が探し求めていた教会オルガニストの役目は、人々と共感と感動を共にする場を創り出すことだと悟りました。これがバッハの森の原点です。

1976 年に帰国した彼女は、相続した遺産を全て寄付して、友雄と協力してバッハの森を建てました。この度、一子の思いを継承して、宮本とも子さんが、CD「バッハの森からの贈り物」を作製してくださったことに感謝しております。（石田友雄）

CD「バッハの森からの贈りもの」

“Fruits of Bach Grove”

— オルゲルビュッフライン — 完成までの足跡

この度、私、宮本とも子は、J. S. バッハ『オルゲルビュッフライン』（BWV 599～644）全曲を収録したCDを、「バッハの森からの贈りもの」（Fruits of Bach Grove）と題してリリースいたしました。ご協力くださった多くの方々への感謝の思いを籠めて、このCDを完成するまでの足跡を報告いたします。

* * *

一子先生との思い出

1974年頃から、恩師、林佑子先生（この秋、米寿をお迎えになる、元ニューイングランド音楽院オルガン科主任教授）より、しばしば木村一子先生のことを伺っておりましたが、初めて一子先生にお目に掛かったのは、リヒテンシュタインで開かれたオルガンのマスタークラスに参加したときのことでした。チャーミングな優しいお人柄に感激したことをよく覚えています。

それから時は流れ、一子先生に再びお目に掛かったのは、エルサレムで石田友雄先生とご結婚になっていた一子先生が、ご帰国後お二人でつくばにバッハの森を創設され、そこにアーレント・オルガンを建造なされた翌年、1990年のクリスマスでした。バッハの森のクリスマス・コンサートで、オルガンを演奏するようご招待いただいた時です。まだエクスプレスが開通していない時代でした。一子先生は、つくばセンターのバス停に車でお迎えに来てくださいました。この時、友雄先生とは初めてお目に掛かりました。また現在バッハの森クワイア指揮者の比留間恵さんと一緒に過ごしたことも覚えています。

その頃、フェリスホールに石井記念オルガンが、テイラー&ブーディーによって建造され、フェリスでの仕事も始まり、2人の息子たちが幼稚園生でしたので、なかなかつくばに伺うことができませんでした。ただ、2003年に夫、耕一がつくばに赴任することとなり、バッハの森で開かれていた友雄先生の聖書の講義に参加させていただいて、有り難いご縁が戻りました。私の方は音楽学部の教務主任としてカリキュラムの改革などに取り組んでおりましたが、その上、2004年に福井県立音楽堂ハーモニーホールの大オルガン設置

に伴い、講師を引き受けたため、横浜と福井を往復する生活となり、2008年春までは、どうしてもバッハの森に伺えない状態でした。

友雄先生にお元気になっていただきたくて

ようやく、これからバッハの森に伺えると思った2009年、年明けに、一子先生の訃報が舞い込みました。どうしたらよいか分からず、耕一と一緒にバッハの森に友雄先生をお訪ねしました。沈痛な面持ちの先生に、「今日は何か召し上がりましたか」と伺うと「何も口に入らない」とおっしゃるので、キッチンを拝借して野菜スープを作らせていただき、一緒にいただきながら、ああ、これからどうなるのかしら、どうしよう、ということのほか何も思い浮かばなかったことを鮮明に思い出します。

友雄先生の素敵なパートナーだった一子先生に代わる人は、この世にいません。でも、友雄先生にお元気になっていただく方法はないものかと考え、同時に教会音楽を聖書学者として研究なさっているご研究を学ばせていただきたく、バッハの『クラヴィアユーブング第III部』を講義していただけないかとご提案いたしました。先生は、初め余り乗り気ではいらっしやいませんでしたが、私が余りにも熱心にお願ひするので遂にお引き受けくださり、この年の秋から隔週1回、4年続いたご講義になりました。

ご講義は、楽譜の裏に隠れている、作曲者バッハにとっては当たり前の前提である教養や常識に始まり、ミサとは、カテキズムとは、という大枠、コラールの歌詞が意味することなどを、聖書に遡って詳しく説明していただく内容の濃いものでした。毎回、1曲ずつ演奏させていただき、私にとっては、この上ない勉強の機会となりました。その結果、2013年5月に、フェリスホールのオルガンでこの曲集の全曲演奏をさせていただくことができました。なお、現在、今年9月にフェリスホールで収録した『クラヴィアユーブング第III部』のCDを来春リリースするための準備中です。

大破したオルガンの復活

2011年3月11日の大地震は、バッハの森記念奏楽堂にも及び、アーレント・オルガンの中央の一番大きなパイプは5メートル落下して大破しました。同時にオルガンケースの中のすべてのパイプは、互いにぶつかりあって破損しました。バッハの森は、直ちにこのオルガンを建造したユルゲン・アーレントさんに修復を依頼しましたが、彼はすでに老年のため隠退しており、後を継いだヘンドリックさんからは、現在、余りにも多数のオルガンの建造と修復があり、すぐには行けないし、いつ行けるか目途がたたないということでした。震災後には各地のオルガンの修復のため、海外からも複数のオルガン建造家が来日予定でした。その

情報をアーレントさんに伝えていただき、かねてから厚い信頼関係にあるテイラーさんにアーレントさん自ら直接連絡を取ってくださり、テイラー&ブーディーの技術者に修理を行ってもらいたいという運びとなりました。

大震災の5ヶ月半後、派遣されてきた2人の技師、ロビー・ローソンさんとクリス・ボノさんが、8月31日から9月5日までの6日間、文字通り寝る間も惜しんで修復作業に取りかかった結果、演奏可能な状態まで大破したオルガンを美事に復活させてくださったことは驚きでした。同時に彼らは、このオルガンに耐震工事が必要であることと、建造以来22年間に破損した部分があることも発見しました。そこで、2014年3月と今年3月に再来日して、すべての工事を完了してくださいました。

アーレント・オルガンの大破と修復に関して、感激したことがもう一つあります。この修復工事には約600万円かかりました。通常会計から支出できる金額ではありませんし、積み立てもないことを会員に報告してオルガン修復のための募金をしたところ、7年間に約590万円集まった、と『バッハの森通信』の前号に報告されていました。この報告を読んで、会員の皆様方がこのオルガンをどれほど愛しておられるかということを目の当たりにいたしました。

いざ録音！

以前、一子先生が「これは門外不出よ」といわずらったような微笑みを浮かべながら、友雄先生のコーラルの対訳歌詞が詰まった『オルゲルビュッフライン』の研究ファイルを誇らしげに見せてくださったことがあります。数年前からこのご研究はいつ完成しますか、と友雄先生にお尋ねすると、「そうね、いつかは纏めなければ・・・」とおっしゃるのですが、はっきりしたことはおっしゃってくださらないので、どうしたらこの願いが実現するか、ここ数年考えてまいりました。

そこで、『クラヴィアユーブング第Ⅲ部』のときと同じように、研究会で取り上げていただきたいとお願いする一方、私の手足が動くうちに作品の録音を先行することを思いついてご相談したところ、いつものように温かいご理解を示し、励ましてくださいました。こうして、『オルゲルビュッフライン』は、去年から「オルガン音楽研究会」の研究テーマになり、これまでに「復活祭」「聖霊降臨祭」「カテキズム」のコーラル、今は「アドヴェント」のコーラルを学んでいます。

確かに、まだ「降誕祭」「受難」などが残っていますが、録音を取る第一の条件は、オルガンの状態が良いときで、気候的にも寒すぎず暑すぎず、冷暖房を必要としないときです。それに私はまだ大学に在職中の身なので、録音に割ける期間は春休み中の数日間しかありません。修復と調整の終了に続けて3日間で録音するスケジュールを立て、関係者の皆さんにお願いし

ました。

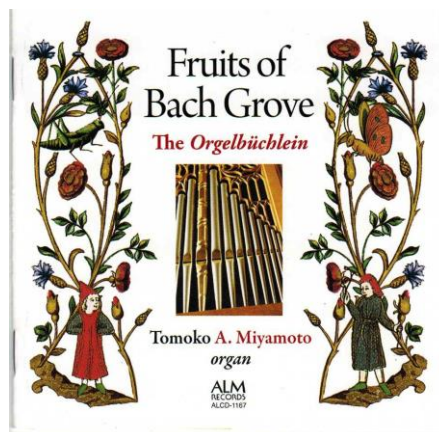
バッハの森記念奏楽堂に響く美しいオルガンの音を、奏楽堂で聴いているように録音して欲しいと強く希望し、ALMレコーズに製作を依頼しました。責任者の小島幸雄さんは、2010年に浜松市楽器博物館のコレクションシリーズ23でクラヴィコードの録音をしてくださった方です。マイクを通した音ではなく、まず奏楽堂でオルガン浴をして、その感動を切り取ってほしいとお願いして、マイクのセッティングには相当時間を費やしていただきました。

一曲一曲のコーラル編曲は短いのですが、45曲もあるので、3日間という録音日程は決して十分ではありませんでした。初日はマイクのセッティングを主体にして、録音の開始は午後4時。翌日は午前、午後と録音できましたが、最終日は朝から雨模様で、屋根に当たる雨音が止まず、午後3時近くまで録音を開始できませんでした。聴衆に近いリュックポジティブの音と上方にあるハウプウトヴェルクの音のバランスを上手く取っていただき、生の笛の音を近くのマイクで、残響はフロアに置いたマイクで録音していただきました。後で考えると、あの集中力はどこから来たのか、と我ながら不思議に思えるほどでした。奏楽堂の後ろに飾ってある一子先生のお写真には終始明かりをつけて、しっかりと見守っていただきました。

完成した CD

視覚的なイメージからこのCDのタイトルに至るまで私の思いを実現してくださった編集者、嶋ゆりかさんに心から感謝いたします。また45曲のコーラルの歌詞1節のドイツ語と日本語の対訳を、友雄先生がつけてくださいました。更にご著書のリストの最後に、『オルゲルビュッフラインのコーラル』を近刊として記載してくださいました。「先生、お元気になられましたよね。一子先生の笑顔とご一緒に」。

今回、このような形で、バッハの森における学びを一つの形にさせていただけたのも、バッハの森会員の皆様がこのアーレント・オルガンを愛し続け、修復に力を合わせてくださったお陰と思い、改めて心より御礼申し上げます。(宮本とも子)



日誌 (2017. 7. 1~9. 30)

7. 6, 13, 20, 27 運営委員会 参加者 4, 4, 4, 2 名。
7. 16 はじめてみよう! ハンドベル
参加者 午前 17 名、午後 17 名。
7. 17, 24 運営委員会 参加者各 5 名。
8. 19 会場設定とゲネプロ 参加者 10 名。
8. 20 はじめてみよう! ハンドベル
参加者 午前 15 名、午後 12 名。
夏休みの音楽会
参加者 午前 91 名、午後 82 名。
8. 21 訪問 岩村かおる氏 (フォルテピアノ奏者)。
8. 21~9. 7 夏期休館
9. 8~12. 16 秋のシーズン
9. 15 CD 到着「バッハの森からの贈りもの」(ALM
Records) 宮本とも子 (Organ) : J. S. バッハ
「オルゲルビュッフライン」(BWV 599~644)。
9. 16, 17 教会音楽ワークショップ (モテット
「イエスよ、私の喜びよ」) 参加者 : 16 日
13 名、17 日 15 名。
9. 7, 14, 21, 28 運営委員会 参加者 4, 4, 4, 6 名。

オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習

7. 4/1 名、7. 5/2 名、7. 6/2 名、7. 7/1 名、
7. 11/1 名、7. 12/2 名、7. 13/3 名、7. 14/1 名、
7. 18/1 名、7. 19/1 名、7. 20/2 名、7. 21/1 名、
7. 25/1 名、7. 26/1 名、7. 27/1 名、7. 28/1 名、
8. 15/1 名、8. 16/1 名、8. 17/2 名、8. 18/2 名、
8. 19/1 名、8. 22/1 名、8. 23/2 名、8. 24/1 名、
8. 25/1 名、8. 29/1 名、8. 30/2 名、8. 31/1 名、
9. 1/2 名、9. 5/2 名、9. 6/2 名、9. 7/1 名、
9. 8/1 名、9. 9/1 名、9. 12/2 名、9. 14/1 名、
9. 15/2 名、9. 19/1 名、9. 20/2 名、9. 21/3 名、
9. 22/1 名、9. 26/1 名、9. 27/2 名、9. 28/2 名、
9. 29/1 名、9. 30/1 名。
-

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

- コラール・カンタータ研究
コラールとカンタータ (JSB)
9. 9 第 422 回、三位一体後第 9 主日のカンター
タ「この世に私は何を求めよう」(BWV 94) ;
コラール「何をわれは世に求むるか」。オル
ガン : M. レーガー「おお神よ、あなた、善
き神よ」(Op.67/30)、海東俊恵。参加者
11 名。
9. 30 三位一体後第 13 主日のカンタータ「あなた
にのみ、主イエス・キリストよ」(BWV 33)。
コラール「主にのみ、主イエスよ」。オルガ
ン : J. S. バッハ「栄光がいと高い御座にい
ます御神にあるように」(BWV 33/6)、
海東俊恵。参加者 9 名。

学習コース

- バッハの森・クワイア (混声合唱) 9. 9/15 名、
9. 30/14 名。
オルガン音楽研究会 9. 22 /8 名。
コラール研究会 9. 8/7 名、9. 29/9 名。
クラヴィコード・オルガン教室 9. 22/5 名。
オルガン教室 7. 14/3 名。
オルガン・クラブ 9. 15/3 名、9. 29/3 名。
声楽アンサンブル 7. 8/5 名。
器楽アンサンブル 7. 8/3 名。
声楽教室 7. 8/2 名。
チェンバロ教室 3 名。
読書会 : 聖書 9. 9/5 名、9. 30/5 名。
ハンドベル・リンガーズ (小学生のハンドベル・
クラブ) 9. 10/10 名。